
「大学論」の授業研究と自校教育の課題

研究代表者	上垣 豊	(法学部)
共同研究者	松倉 文比古	(文学部)
	長谷川 岳史	(経営学部)
	小長谷 大介	(経営学部)
	竹内 綱史	(経営学部)

1 今年度の課題と取組

2011 年度の FD で「大学論」の授業研究をテーマにし、2012 年度ではさらに「大学論」の授業と自校教育科目群が設置された場合の大学論の位置づけ、役割について考察し、同時に自校教育の担当者を増やす方策を検討することを課題とした。前年度は個々の取り組みはほぼ予定通り行うことができ、大学論の半期分のシラバスも組み直すことができた。だが、自校教育科目として設定された場合の「大学論」の位置づけ、役割の考察、担当者を増やす方策の検討については十分行えなかった。そこで今年度は、以下のような取り組みを行うことにした。

- 1) 「教養科目特別講義」として試験的に行っている「大学論」(前期 2 単位)の授業の今年度の成果と問題点を検討する。
- 2) 前年度の FD の総括を今年度 2 月に国学院大学行われた自校教育シンポジウムの報告を踏まえて再検討する。
- 3) 自校教育の取り組みを行っている他大学から講師を招き、公開の研究会を開催する。4) 1)～3) のうえで、自校教育科目として設定された場合の「大学論」の位置づけ、役割について検討する。
- 5) 担当者を増やす方策の検討については、担当者の要件の検討として、議論する。
- 6) 引き続き、自校教育関連文献の収集に努める。

これらの取り組みのなかで中心として位置づけたのは 3) の他大学から講師を招いた、公開研究会の開催であった。今年度は 3 年間の FD のしめくりとして、自校教育では先駆的な役割を果たした立教大学から豊田雅幸先生を講師に招き、あわせて本学での「大学論」の授業実践報告を行うことにした。

2011、12 年度の 2 年間の FD を通じて確認されたのは以下の点であった。日本で自校教育が正課として初めて行われたのは、10 数年ほど前の立教大学においてであった。以来、何らかの形で自校教育が行われている大学はかなりの数にのぼり、大学教育において市民権を得ているといえてよい。本学でも自校教育科目をおくべきであるという議論が大きくなりつつある。だが、正課の科目として行われているところはまだ多くはない。そもそも学士課程教育の中での位置づけについてはいまだに定まっておらず、その目的や内容自校教育を行っている大学の間でも、一致していない。さらには、具体的な問題では担当者の確保が大きな問題になっているように思われる。

こうした問題意識のもとに豊田先生には、立教大学での自校史教育の経緯と現状を話していただいたうえで、自校史教育の目的、内容、カリキュラムの中での位置づけ、ほかの教養科目との関連、授業外での自校史教育の展開(立教学院史資料センターなど学内機関との協力・提携)などをお話いただくことにした。研究会は大学教育開発センターの FD サロンの一つとして 2014 年 2 月 26 日(水)午後 3:15～5:15 の予定で開催された。参加者は 13 名と、最近の FD サロンのなかでは数が多い部類に入った。

豊田先生のご報告内容は FD サロンレポートに掲載されているので、この報告書では同じ研究会

で行われた「大学論」の授業実践報告を簡単に紹介することにしたい。

2 3年間の「大学論」の変化と発展

2011年度から「教養教育科目特別講義」として始められた「大学論」の受講者数の変化は下記のとおりである。

受講登録数	2011年度	55人
	2012年度	43人
	2013年度	74人

人文科学系の科目のなかでは受講登録者数はやや少ないが、一定の受講者を集めており、3年目になって定着してきたと言えるだろう。なお、おおよそ受講登録者のうち、2012年度は30名程度、2013年度は50名程度が平均して出席している。

学生の授業表アンケートでは予復習にかけた時間が多いことが特徴であり、2012年度で1.3h(大宮深草教養教育科目中央値 0.3h)、2013年度では1.1h(同 0.5h)であった。

そのほかの授業アンケートの数値は大宮深草教養教育科目の中央値とほぼ同水準であった。

この三年間で担当者もシラバスも少しずつ変化していった。2011年度には松倉先生上垣の二人の担当で、内容も、自校史、大学史、大学改革の動向の三つの部分からなっていた。それが2012年度には、竹内先生が加わり、自校史+大学史+大学改革の動向+哲学的大学論(クリティカル・シンキングの練習含む)となり、2013年度には、広島大学の「平和学」の設置経過に学んで、長谷川先生が冒頭の2回を担当することになり、建学の精神+自校史+大学史+大学改革の動向+哲学的大学論(クリティカル・シンキングの練習含む)という構成になった。これが一応の完成形であろう。

来年度は、諸般の事情で松倉先生が担当できなくなり、その代りに長谷川先生担当分を増やし、小長谷先生が3回分担当することになった。さらに典型的な総合科目であるため、担当者それぞれの評価を合算する形で成績評価を行っており、最後のまとめがないという弱点を抱えているので、来年度は最後に担当者全員でできてディスカッションの形式でまとめを行うことになっている。

3 学生の受講動機

学生の受講動機は、前年度同様、第一回目の授業で、「大学論」を受講した動機についてアンケート調査した。51名の学生からアンケートを回収した。(二つまで選択可能)

a 選択肢

1. 成績評価方法	5
2. 先輩・友人の推薦	5
3. 面白いと聞いた	0
4. 担当で選んだ	3
5. 歴史に興味があるから	4
6. 大学について考えてみたいから	29
7. 龍谷大学の学生だから	9
8. 人に龍谷大学について説明できるようになりたい	10
9. 龍谷大学の学生であることに誇りをもてそうだから	3
10. シラバス等で興味を覚えた	20
11. 消極的選択(予備登録でほかの科目を選んでしたが、外れたため等)	7
12. その他(自分の知らない分野だと思った)	1

「6.大学について考えてみたいから」が一番多く、次いで「10.シラバス等で興味を覚たから」が続いた。7～9の龍谷大学と関わりのある項目は、長谷川先生が建学の精神について今年度から教えることになったためか、前年度よりもかなり増えて22となり、10とほぼ同じ水準になった。

下記に自由記述の例を二つほど紹介しておく。

「地元・高校の友人に「龍谷大学って仏教の大学というイメージしかない。」と言われた。講義を通して龍谷大学の歴史や存在意義について学び、龍谷大学の魅力を龍大以外の人に自信を持って説明できるようになりたいと思い受講した。」(法学部2回生、5,8選択)

「仏教の大学というイメージは強いが、入学後仏教の授業は必修であるものの思っていた程強要されてはいないと思う。キリスト教徒である私は安心したが、仏教徒、浄土真宗派である理由で入学した人はどのように感じているのか疑問に思った。」(法学部2回生、6,8選択)

「最初、大学論の名前をみただけでは受講しようとは思っていなかったが、シラバスを読み学ぶ機会がないような内容で興味をもち受講しようと思った。大学生である自分がたまに何のために大学にいるのかと思うことがあるので学んでみたい。」(経営学部2回生、6,10選択)

4 長谷川先生担当分(建学の精神)

「大学論」において、「私立大学と建学の精神」(第1回)、「龍谷大学の建学の精神と『仏教の思想』」を担当した。

第1回では、「『建学の精神』の空洞化と再生」と題し、まず国内外の私立大学の建学の精神を紹介し、その後、本学の歴史と建学の精神に関わる問題や議論について講義した。特に深草学舎と瀬田学舎の開設と併行して起こった建学の精神の空洞化とその後の再生については、学生も強い関心を示し、現状の「龍谷大学の『建学の精神』」がなぜこのような文章になっているのか、理解したようだった。

第2回では、「龍谷大学の建学の精神と『仏教の思想』」と題し、本学のカリキュラムの変遷とともに、「仏教の思想(仏教学)」の位置づけについて講義した。また、資料として「各学部・学部共通コースの『教育理念・目的』『学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)』『教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)』」を配布し、理念・目的とDP、CPの関係について解説したことにより、多くの学生から「なぜ履修要項のはじめに理念・目的とDP、CPが記載されているのか、はじめて理解できた」との感想があった。

第2回の最後に「この『大学論』のような授業は何回生の時に受講するのが適切だと思いますか」というアンケートをとったところ、結果は以下ようになった。

1回生前期	13名	1回生後期	15名
2回生前期	23名	2回生後期	4名
3回生前期	4名	3回生後期	0名
4回生前期	1名	4回生後期	1名

1回生前期とした理由としては、「はじめに知っておくべき」という回答が大半であったが、1回生後期と2回生前期とした理由の大半は、「1回生前期だと大学のこともよくわからず、こなすだけになるので、一定期間、大学に慣れた頃にこのような講義があると効果的である」というものであった。2回生後期や3回生前期とした理由としては、「就活に活用できる」というものが多かった。

5 松倉先生担当分の学生の感想から

松倉先生担当分(自校史)の授業内容については2011年度報告書の中で紹介しておいたので、実

施した小テストに書かれた学生の感想を二つ紹介しておきたい。

「私は今まで、この授業を選択するまでは、自分の大学の創設者や歴史に関しても知らず、何も考えずに大学生活を過ごしていた。しかし、授業で自分の大学が戦時中これほどまでに戦争協力をし生徒も学校も軍隊化されていたという事実を知り、時代だから仕方ないことだと思いつつショックを受けた。これから大学も、その大学で学ぶ私自身も、大学の歴史を知ることによって、どんな歴史を背負っていても過去の悪いところや善いところをきちんと見定め、大学とはどうあるべきなのか見直すことが大切だと感じた。過去はもう二度と戻ることもできないし、時代の流れや雰囲気も常々変わるものであるから、時代におうじながら、また真の大学の意義は流されず貫き通す。それを生徒に伝授しながら生徒とともに成長していく大学であってほしいと通っている生徒として強く感じる。」(政策学部 2 回生 N.N.)

「戦後の新体制が龍谷大学に影響を与えたことが最も大きな問題ではないか。戦争の真った中で国民精神総動員運動などが行われ、戦争協力はやむを得ないという考えもあるが、適格審査の具体的な結果を見るとその考えを改めさせられた。大学数が 222 校で不適格者が 86 名、そのうち 10 名もの教職員が龍谷大学の教職員である。1 校当たり約 0.3 人、単純計算では 3 校でやっと 1 人当たり程度のところにもかかわらず。この記録は龍谷大学が戦争に協力的であったという事実をうらづけるものであり、それを問題点として浮き彫りにさせるものである。」(法学部 2 回生 T.K.)

この二例にとどまらず、龍谷大学の戦争責任の問題に触れた感想が多かった。

6 上垣担当分(大学史、大学改革)、竹内先生担当分(哲学的大学論)

大学史の部分では、大学史を 3 回程度で行うのは困難なので、学生の学びを問い直すトピックを抽出することにした。授業では 19 世紀のベルリン大学、オックスフォード改革までは割合とスムーズにいくが、アメリカの大学を説明するのに時間がかかっている。授業中に作成させた大学史に関する小レポートでは、「中世ヨーロッパの大学、19 世紀のドイツの大学、オックスフォード大学、20 世紀前半のアメリカの大学、戦前の日本の大学制度のうち、すくなくとも二つ以上を比較して論じた上で、現在の日本の大学が導入すべき、あるいは見習うべき点について 200 字程度で述べなさい」という課題を出した。51 人のレポートの中で、もっとも多かった点は「討論・ディベート」(8 人)であり、続いて「研究と教育の統一」(7 人)「口頭試問」(6 人)、「一般教養重視」(5 人)と続いた。大学改革の最近の論調の中で「研究と教育の統一」というフンボルト理念は批判の対象となっているが、学生は大学に対して研究と結びついた教育に強い関心を抱いていることがわかる。

大学改革に関する小レポートで用いられたキーワードの頻出度数は次頁に掲げた表ようになった。頻度数はレポートの作成のしやすさ、授業内容とも関係しており、学生の関心を直接示すものでは必ずしもない。「建学の精神」が前年度と比べ急増したのは、長谷川先生が最初に建学の精神について授業を行ったこと、そしてギャップ・イヤーについては、NHK「クローズアップ現代」のビデオを見せたことが影響を与えているものと思われる。インターンシップ、汎用的能力が多かったのは前年度同様であり、他方ではキャリア教育が減っているのは、今年度は新たにギャップ・イヤーがキーワードに加わったことと関係しているだろう。その他のキーワードはそれほど大きな変化はない。

キーワード	頻度
ギャップ・イヤー	31
インターンシップ	26
汎用的能力	24
建学の精神	19
自己形成	18
教養（教育）	18
初年次教育	16
キャリア(形成)教育	14
副専攻	13
学士課程の構築	11
学位の質保障	11
FD	11
リベラルアーツ	5
単位制度の実質化	1

竹内先生担当部分では、クリティカル・シンキング入門を兼ねていて、三段論法について学ぶことになっており、毎回小レポートを課したが、2013 年度は受講生が増えたため、教員の負担が限界に達した。来年度は受講数を見て、対応を変えることにしている。

7 自校(史)教育のあり方をめぐって

最後に上垣の私論の形で、自校(史)教育のあり方について、いくつか論点を提示しておくことにしたい。

まず、自校史教育、とくに正課にしたり、あるいは自校教育科目群を作ったりする動きは特殊日本的な現象ではないかという疑問である。そもそもオックスブリッジやハーバードに自校史教育科目は正課のコースにあるわけではないだろう。もちろん、これらの名門大学で広い意味での自校史教育がされていないわけではない。一般に、歴史と伝統を重んじる欧米の大学はるか昔から不断的な努力を続けて自校(史)教育を行ってきた。

そこで問題になるのは、正課としての自校(史)教育と大学教育全体を通じて行われる自校(史)教育との関係であろう。自校(史)教育を正課として行うことが自己目的化されたり、それに特化したりするのは、問題ではないであろうか。大学教育全体を通じて自校(史)教育が行われることが大事であり、正課としての教育はその一部にすぎないという認識に立つべきであろう。日本の

大学の習性として新たな課題が生じるとそのたびごとに新たな科目を作る傾向があり、その結果、大学教育全体の問い直しにならず、伝統的なカリキュラム、科目、とくに教養教育が圧迫されて終わる向があることにも注意しなければならない。

自校(史)教育の必要性は、日本では 20 世紀末から 21 世紀初頭にかけて初めて問題提起がされた。立教大学はその先駆的な事例になるが、それまで日本では「建学の精神」とは何かあまり問題にならなかったし、大学とはそもそも何かについても一部の教員・研究者の外には関心が広がらなかったためであろう。この点では自校(史)教育が日本の大学教育に投げかけたものは大きく、一過性の流行としてではなく、それが何を問題提起しているのか、真剣に考えるべきであろう。

正課にすることに特化すべきでない論じたのは、正課としての自校教育を実施している大学は少数派であり、正課にするに際して、担当者の問題など、物理的困難が伴うからでもある。立教大学の場合でも、狭義の意味での自校史教育は全学で 1 コマ程度であり、これを受講している学生は年間多い場合でも数百名にとどまっている。しかも立教大学や京都大学、広島大学など正課として自校教育科目がある大学でも、担当しているのは立教学院資料センターや文書館の教員であり、全カリや学部の教員が担当しているわけではない。龍谷大学の場合、京都学舎の教養教員が担当し、継続的に授業を行うのはかなりの困難を伴い、担当者個人に過大な負担を強いることになる。現に、来年度から松倉先生が授業担当から外れることになり、各方面に自校史部分の担当者を探したが、ついに適当な候補が見つからなかったのである。

次に、自校教育科目を教養教育科目の中で増やしていくことは可能であろうか。龍谷大学史は、日本近代史との結びつきのなかで展開可能であろう。だが先述のように、担当者の育成が課題であり、大学史の史料を専門的に扱う部署の整備拡充が先決である。だが、西欧の大学の歴史を含めた大学史を単独で独立させて教養科目にするのは適切ではないであろう。内容からして、専攻科目か大学院での教育が適当であると考え。他方で、「現代社会と大学」などという名称のもとに、その一部を自校史部分に振り向けて科目をおこすことは可能であろう。(教育)社会学的アプローチと哲学的アプローチが可能だが、現行の「大学論」とどれだけ異なるのかという別の問題が生じてくる。哲学的大学論を独立させて教養科目とするのも、教養科目としては内容が特殊か、あるいは難しすぎ、その内容を哲学系の科目の中に溶かし込むのが適切であろう。また、地域学として科目をおこすという考えもあるが、その場合は、教養科目としてふさわしい広がりを持たせることができるのか、という疑問が生じる。

最後に、自校(史)教育を考える場合、大学を設立した母体、宗派との関係を抜きにして論じることはできない。本報告では十分検討できなかったが、キリスト教系大学と仏教系大学とでは自ずから自校(史)教育のあり方も異なってくるはずである。本学で自校(史)教育を進めるのなら、宗派と大学の関係を理論的に整理しておく必要があるだろう。それが自校(史)教育を大学教育全体で展開する前提になるのではないであろうか。